



2025.12.15  
Vol.28

# 茂吉記念館だより

## 目次

寄稿／本多 稜「茂吉の蔵王に触れる」	1-4
館長より／「茂吉のドナウ源流行を追って」	5-8
資料紹介／斎藤茂吉原稿「御進講草稿」	9-10
短信（揭示板）	11-12





# 茂吉の蔵王に触れる

本多 稜



蔵王山頂斎藤茂吉歌碑と筆者

斎藤茂吉は山の歌人でもある。茂吉の短歌作品が人間味あふれた大きな一つの宇宙をなしていることは言うまでもないが、山に関連する歌の数は、非常に多い。なにしろ茂吉は行く先々で山を詠んでいる。山があってもなくても山を歌にするのである。『あらたま』におさめられた「長崎へ」では、特急電車の中から富士山を詠み伊吹山を詠み、『つゆじも』の「洋行漫吟」では、

香港、マラッカ、セイロン、  
紅海、アフリカ、そして地中海と洋上  
から各地の山を眺めつつ詠む。『遠遊』、『遍歴』ではウィー  
ンの森、ミュンヘンのあ

る南ドイツの山々、ユングフラウの高峰、南イタリアまで足を延ばしベスビオ山も歌に収め、「帰航漫吟」ではヨーロッパの思い出と日本の山々の懐かしさに触れつつも、「洋行漫吟」の時と同じように山々の歌を詠む。さらに『連山』では満州から内モンゴルまで進み、平原にある雪山はおのづから白き石等を見るに似たり、〈紅き雲あやしきまでに厚らにて棚びくとき  
に山ひとつ見ず〉、〈地平のうへに淡然に置かれたるものの如くに孤山がひとつ〉などと、地平線上にほとんど山が無いことをわざわざ詠んでいる。大洋の上から山を求め、地の果てまで出かけて行って山が無いことを歌にするのが、山の歌人斎藤茂吉である。

とはいえ、茂吉の山の歌の中心は蔵王である。蔵王山に加え、その北西に位置する月山、羽黒山、湯殿山の出羽三山、再び最上川を挟んで北に位置する鳥海山は、茂吉にとってはとりわけ聖なる山々で、それらの山々を詠んだ歌は多い。〈スキイもちて雪ふる山に行く友はしきりに吾を誘へど行かず 『たかはら』〉という歌に垣間見られるように、蔵王を始めとする山形の名峰は、茂吉には崇拜の対象でもあると同時に、親しみのある心の拠り所でもあった。

火の山を繞る秋雲の八百雲をゆらに吹きまく天つ風かも

改選『赤光』

みちのくの蔵王の山に消のこれる雪を食ひたり沁みとほる  
まで

### 『寒雲』

すでにして蔵王の山の真白きを心だらひにふりさけむとす

### 『小園』

みちのくの蔵王の山にしろがねの雪降りつみてひびくその  
おと

### 『つきかげ』

有り難いことに、昨年の三月、茂吉の蔵王の懐に入り、その歌  
心に触れることが出来た。「新アララギ」代表の雁部貞夫先生と



山形側を望む 左蔵王山（熊野）神社 中央奥斎藤  
茂吉歌碑 右「日本観光地百選一位」記念碑

の「茂吉・いのちの山河」を  
テーマとする対談を控え、茂  
吉の歌の足跡を辿っておこう  
と蔵王を訪れ、歌碑巡りを通  
じて茂吉の歌を体感、堪能し  
た。蔵王山や蔵王温泉にある  
茂吉の歌碑を巡ることによっ  
て、茂吉の蔵王を、より身近  
に感じるようになったのだ。  
その時の体験を記しておきた  
い。

川に沿って蔵王に向かった。最上川兩岸の山々の山容は比較的  
庄内空港で車を借り、最上

優しい。本州中央部の、例えば天竜川の山々の切り立つ陰しさ  
はなく、むしろ欧州大陸の大河のような壮大さがある。滞欧時  
の茂吉は、ドナウ川に最上川を重ねて見ていたのだろうと感じ  
た。蔵王温泉に宿をとり、翌朝さっそく歌碑巡りに出かけた。凍  
結したところもあるアスファルトの道を注意しながら下り、雪  
の明るさと硫黄の匂いをあたたく感じながら進むと

蔵王より南のかたの谿谷に初夏のあさけの靄たなびきぬ

### 『小園』

の歌碑があった。雪は降っていなかったが空は薄鼠色の雲に覆  
われており、モノトーンに近い風景の中、くろぐろと歌碑が立  
ち、その上には帽子のように雪が積もっていた。そこで初夏の  
みずみずしい蔵王を思い浮かべてみるのは、この歌のイメージ  
が際立ってかえって新鮮だ。すぐ近くに歌碑がもう一つあった。

ひむがしの蔵王の山は見つれどもきのふもけふも雲さだめ  
なき

### 『石泉』

蔵王は雲の中。いつかは茂吉の見た光景を自分の目で確かめ  
たいと思う。蔵王を再び訪れるべき理由ができた。

蔵王をのぼりてゆけばみんなみの吾妻の山に雲のゐる見ゆ

### 改選『赤光』

蔵王みはらし公園にも歌碑がある。といっても一面の新雪だ。  
歌碑のところまで行こうかどうか迷うまでもなく、一歩ずつ雪

に足を差し込み、また引き抜いて歌碑に近づいていった。もはや雪山ハイキング気分である。雪の積もることのほとんどない土地に住む山好きの者の発想だろうか。これほど安全に、手軽に、雪山を楽しむようなよろこびはないであろう。私は頂上碑ならぬ茂吉の歌碑に向かって大きな足跡をつけて進む。

しづかなる春山峽のかなしさよ杉原ゆけば杉の香ぞする

### 『霜』

公園の横の、半ば氷った雪の参道を上り、酢川温泉神社に着く。歌碑は半ば雪に埋もれている。歌碑の方へ二三歩近づいただけで、腰までの雪になった。ラッセルしながら進む。ラッセルとは登山用語で、雪をかき分け押し分け、雪を固めつつ道を作って進むことである。冬山も愛した山男時代が懐かしい。茂吉の歌碑まであと五メートルほどか。歌碑にタッチし、新雪をかきわけて歌の文字を拾う。蔵王の春の杉の香りの歌だ。雪の香りをぞんぶんに吸い込んだ。酢川温泉神社の参道を、グリセードして滑り下り、蔵王スカイケーブルの上の台駅に向かう。

ひさかたの雪はれしかば入日さし蔵王の山は赤々と見ゆ

### 『白桃』

少し上ったところに二つの歌碑が並んでいた。

万国の人来り見よ雲はる蔵王の山のその全けきを

とどろける火はをさまりてみちのくの蔵王の山はさやに聳



歌碑行 蔵王山頂(熊野岳) 昭和 14 年 7 月 8 日

ゆる

### 『つきかげ』

私は「万国の」の一首を好む。この歌は昭和二十五年に「新日本観光地百選山岳の部」において、蔵王が第一位に輝いたことを喜び、茂吉が当時住んでいた東京で詠んだものだ。茂吉の歌の魅力の一つは、日本語の母音と子音が絶妙に響きあう音楽性にあるが、この一首は、私には、ベートーヴェン第九の合唱部分の短歌版だと思えるのだ。

宿に戻ると宿の前にも歌碑があつてうれしい。

たましひを育みますと聳えたつ蔵王のやまの朝雪げむり

### 『小園』

宿を後にしてスキー場に向かう。

雪消えしのちに蔵王の太陽がはぐくみたりし駒草のはな

『寒雲』

時折ガスで視界を失う天候の中、ロープウェイの地蔵山頂駅の歌碑を確かめ、短時間でも晴れてくれたらなあと願いつつ、スキーを続けていると、ついにその時が訪れた。風向きが変わり、いつまで続くかわからないが一、二時間ほどは視界が確保できそうだった。蔵王がホワイトアウトしやすい山であることを意識しつつ、スキーをかついで熊野岳山頂に向かう。

陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ

『白桃』

雪に完全に覆われた蔵王山神社の近くに、氷の塊と化した歌碑らしきものを発見。歌の文字は一つも見えなかったが、一部氷のはがれているところがあり、「昭和九年八月」の文字がかるうじて見え、建立碑文を確認できた。スノーモンスターと化した歌碑に寄りかかり、歌を身体で感じたのだった。

蔵王下山後は、月山を眺めつつ北上し、鳥海山を振り返り眺めつつ羽黒山に登り、東京に戻った。

■ 本多 稜（ほんだ りょう）・「短歌人」



## 茂吉のドナウ源流行を追って

今年は、上山市とドイツのドナウエッシンゲン市友好都市盟約締結三十周年にあたり、六月二十五日から七月三日まで、上山市民訪独団（団長・山本幸靖市長）がドナウエッシンゲン市などを訪れた。良い機会であったので筆者も訪独団の一員として参加した。皆さんもご存じのとおり、盟約締結のきっかけとなったのは、斎藤茂吉がドイツに留学していたときに、ドナウ川の源流を求めてドナウエッシンゲン市を訪れたことにある。

茂吉は、三十九歳の太正十年（一九二二年）十月に横浜を日本郵船の熱田丸で出航して、シンガポール・スエズ経由で約一月半をかけて十二月にマルセイユに到着し、パリ経由にてベルリンに到着した。約三週間後に、ウィーンに行き、ウィーン大学精神医学研究所で病理組織学的研究を行った。約一年半後の大正十二年（一九二三年）七月にミュンヘン大学のドイツ精神医学研究所に転学し、脳の病理標本作製や動物実験などの研究生生活を送っていたが、翌年四月十八日から十九日にミュンヘンからドナウ川の源流を求めてドナウエッシンゲン市を訪問している。ドナウ川は欧州を代表する大河で、その流れはドイツ南西部の黒い森といわれるシュヴァルツヴァルト地方を源として、オー



ドナウの泉

ストリア、東欧など十か国以上を横断して黒海に注ぐ、全長二、八五七<sup>五</sup>に及ぶ。ドナウエッシンゲン市にあるブレク川とブリガツハ川が合流するところがドナウ川の源流であり、そこから下流がドナウ川と称される。

ドナウエッシンゲン市内にはドナウの泉と称される源泉があり、毎年六月下旬にはドナ

ウ源泉祭りが開催されている。平成十二年（二〇〇〇年）十月六日には、上山市とドナウエッシンゲン市との友好都市盟約締結五周年を記念して、ドナウの泉の側に斎藤茂吉の歌碑が建立された。茂吉の歌碑は日本中に数多くあるが国外では初めての歌碑である。歌は「大きな河ドナウの遠きみなもとを求めつつぞ来て谷のゆふぐれ」で、茂吉がドナウ川の源流を求めてドナウエッシンゲン市に来て詠んだ一首であり、歌集『遍歴』に収載されて



ドナウエッシンゲン市内に建つ斎藤茂吉歌碑

いる作品である。その歌碑は、茂吉がドナウエッシンゲン市を訪れたときに投宿したホテル「シュッツェン」（現在はレストラン）の向いのブリガッハ川沿いに移設されている。その歌碑から、ブリガッハ川に沿って、茂吉がドナウ川源流まで歩いたであろう約一・五kmの自然豊かな森林の小道が「斎藤茂吉の道」と命名されている。

訪独団は、山本幸靖市長を団長として、川崎朋巳市議会議員、市議会議員、羽島健夫ドナウエッシンゲン日独友好協会会長ほか協会会員、市民など総勢十八人であった。今回の訪独団の旅程を以下に簡単に紹介する。

六月二十五日 夜羽田空港を発ち、翌二十六日早朝にミュンヘン空港に到着後すぐに専用バスで、茂吉がミュンヘンから列車でドナウエッシンゲン市に向かう途中に訪れたウルムに向かい、約二時間半後に、世界一高い塔を有するウルムの大聖堂が見えて間もなくウルム市内に停車した。市内にはドナウ川が流れ、茂吉が「ドナウ源流行」に書いているドナウ川沿いの城壁を利用した遊歩道などを散策し、茂吉が昼食を食べた「Ulmer Spatz（ウルムの雀）」というレストランで昼食を食べた。午後一時にウルムを出発して途中渋滞があったが五時過ぎには宿のホテル（Zum Hirschen）に到着した。十八時過ぎから、ドナウエッシンゲン市のパウリ大市長主催の歓迎夕食会があった。翌十七日朝市内のマーケットで週一回開催される朝市を見学。朝市では、思いがけず一般市民で茂吉に詳しい方（現地の眼医者さん）が、筆者を茂吉の歌碑があるところまでわざわざ案内してくださり、その後、市役所に行ってパウリ大市長を表敬訪問し、簡単なレセプションがあり、来訪者名簿にそれぞれ署名をしたりして歓談した。その後、市内散策の後、茂吉が泊まった場所にあるシュッツェンという店（元ホテル）で昼食をとり、一旦宿に戻って休憩後、正装を着て、市の手配による緑色の市バス（貸切）でドナウ源泉まで行き、源泉を見た後、フュルステンベルク侯爵のお城での三十周年記念式典と夕食会に臨んだ。

翌日の二十八日には、ドナウ源流までバスで移動し、ブリガッ





ベルリンにて 妻輝子・前田茂三郎と

ハ川とブレク川が合流してドナウ川となる地点に行き、その後「斎藤茂吉の道」を茂吉が歩いたのとは逆行して茂吉の歌碑がある地点まで散策した。ちなみに、ブリガッハ川とブレク川が合流してドナウ川となる現在の地点は、洪水対策やビオトープとして、茂吉が訪れたときの地点から二百五十m上流に移されているとのこと。十一時半から、ドナウ源泉のところで年一回の源泉祭があり、パウリ大市長の開会と三十周年記念訪独団歓迎挨拶があった。夜は郊外のレストランで夕食会が催され、ミュンヘンからわざわざ別所健一総領事も出席された。

翌日の二十九日は、山本市長ら四人の方は他の視察のため別

行動となり、残りの訪独団一行は、フュルステンベルクビール工場を見学した後、フュルステンベルク

クレストランでパウリ大市長も出席のもと昼食会が催され、筆者も斎藤茂吉記念館館長としてスピーチの機会を得てスピーチを行った。昼食会によりドナウエッシンゲンでの公式行事は終了し、訪独団一行は、ホーエンツォレルン城を見学した後シュツトガルトへ移動して一泊。翌三十日はシュツトガルト市内見学の後、バートビンプフェン市經由ハイデルベルク市に行き一泊。七月一日はリュースハイムへ行き、サンクト・ゴアルスハウゼンまでのライン川クルーズの後、ヴィスバーデンに行き一泊。翌二日はフランクフルトからの便で三日に羽田空港に帰着した。

今回初めてドナウエッシンゲン市を訪れ、百一年前に斎藤茂吉が訪れたこの地に足を踏み入れて、茂吉が辿ったドナウ川源流への道を歩くことができ感激した。斎藤茂吉が終生、ふるさとの山形を愛し、その中心を流れる最上川の自然・四季を愛したことは、茂吉が詠んだ多くの歌からも知ることができるが、特に、茂吉が十四歳の若さで上山を離れ上京したこと、そして三十九歳で遠い欧州に留学した茂吉がどのような思いでオーストリアやドイツで生活し、遠い日本、ふるさとでの生活を思い起こしていたかを考えると、茂吉がドナウ源流を求めた訳も理解できる。

茂吉がオーストリアで研究生生活を送っていたときに見たドナ



ウ川の情景がふるさとの最上川等の情景と重なり深い郷愁を覚えたことであろう。そしていつかそのドナウ川の上流、更には源流を訪ねて見たいと考えていたのである。そのような茂吉の境涯・思いとドナウ源流行との関係を考えるとき、この度、筆者も茂吉のドナウ川源流行を追い求める旅として訪独団に参加できたことは貴重な体験であった。

斎藤茂吉記念館館長 波 克彦(なみ かつひこ)

### 参考 斎藤茂吉歌集『遍歴』「ドナウ源流行」(抄)

中空の塔にのぼればドナウは白くきらひて西よりながる

Ulm

ドナウの流をりをり見え来り川上にゆくを感じつつ居り  
Sigmaringenを過ぎてよりまどかなる月の光はドナウを照らす

Brigach・Bregeと平野の河ふたつここに合ふこそ安らなり  
けれ

あひ合ひてドナウとなるところ見つ水面は白し日のか  
がやきに

ただ白くかがやき居れど二つ川相合ふ渦を見すぐしかねつ  
ゆたかなる水草なびきこの川の鯉のむらがり怖さへなし  
直岸に来つつドナウに手をひたす白き反射にわが眼まば

しく

ドナウエシingenに来てドナウの水泡かたまり流るる  
も見つ

ドナウの岸の葦むらまだ去らぬ雁のたむろも平安にして  
黒林のなかに入りゆくドナウはふかぶかとして波さへた  
たず

たづね来しドナウの河は山裾にみづがね色に細りけるかも  
なほほそきドナウの川のみなもとは暗黒の森にかくろひに  
けり ※Schwarzwald

この川のみなもととなり山峡のほそき激ちとならむとすら  
む

大さ河ドナウの遠きみなもとを尋めつつぞ来て谷のゆふぐ  
れ

Brigachquelle 尋めむとおもひしがかすかなるこの縁も棄て  
つ

※初版『遍歴』に「ドナウ源流行」の歌があり、特に冒頭十六首は出発からドナウエシingen市を後にする内容となっている。

※初版『遍歴』「ドナウ源流行」は旧版全集から「ドナウ源流行」と誤記されている。

## 斎藤茂吉原稿「御進講草稿」

昭和天皇御製

「御進講草稿」は昭和二十二年八月十六日、上山温泉の村尾旅館で行われた進講に際して、斎藤茂吉が当初模索・検討した言上の内容が記されたもので、斎藤茂吉全集には未収載の原稿です。

八月十三日の茂吉の日記には「言上ノ草稿作り」五分ノ草稿ナルが旨クユカズ、旨ク言ヘナカツタ」、翌十四日の日記には「言上ノ内容ヲ変ヘ、最上川一首ニ限ルコトニシタ」と記されています。実際の内容は同席した茂吉の門人結城哀草果が『御巡幸録 昭和二十二年 山形県』（昭和二十三年十月 山形県発行）に掲載した「歌ものがたり」と題した記事に詳しくまとめており、それによれば十四日の茂吉の日記に記されてある通り、茂吉は最上川の歌についてのみ言上したようです。

その言上では、

最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらず此月ばかり

読人不知 古今和歌集卷第二十東歌

この歌が恋歌で、女性が男性に対して月の障りがあり応じかねるという意味であることを解説しました。次に

広き野をながれゆけども最上川うみにいるまで濁らざりけり

この御製の下句は山形の県民性を詠われたと拝察し感動したことを述べ、実際の最上川は洪水で濁ることもあると付言しました。最後に、

最上川ながれさやけみ時のまもとどこほることなかりける

かも

斎藤茂吉

の自作について、写生の歌でありつつ下の句は山形県民ひいては全国民が日本再建にとどこほることなく努力するという寓意があるとも解説しています。

進講は全体で三十分程と予定され、茂吉の持ち時間は十五分程でした。明治天皇と上山・山形とのかかわりという点で、山形県令三島通庸の新道開削と明治十四年の東北巡行についても言上するつもりだったようですが、話題が散漫になることなどから最上川の歌三首に内容を絞ったようです。三十分の進講後、懇談に花が咲いたため全体で一時間に及ぶ拝謁となりました。

草稿の後半は、文字の墨が薄く運筆にもめりはりがありません。昭和天皇への拝謁は茂吉にとって心理的負担が大きく緊張していたことは様々な記録として残っていますが、この草稿はそれを如実に示す資料といえます。

この資料は、現在開催中の特別展「斎藤茂吉とふるさと

「みちのく界限」にて令和八年三月三十一日まで展示しております。是非ご覧ください。

■業務係主事兼学芸員 五十嵐善隆

※本紙では「御進講草稿」画像を割愛しています

## 参考 斎藤茂吉日記 昭和二十二年八月

八月十三日 水曜 晴レ 87。 暑気強イ

○三百円百子、富太郎ニ短冊オクル、臥床 ○午後三時ニ言上ノ草稿作り。五分ノ草稿ナルガ旨クユカズ、旨ク言ヘナカツタ ○鮎一尾、征露丸一ツ、ナルコボン丸二粒、○寝苦シカツタ。

八月十四日 木曜 ハレ 室温85。

○酒田ノ青年二人訪ネテ来タ。一時間バカリ費シタ ○言上ノ内容ヲ変ヘ、最上川一首ニ限ルコトニシタ。今宿ノ薬師堂ニ行キ五分間ノ練習ヲシタ 老嫗(74歳)来リイロイロ話シタ、御詠歌、孫 ○奉迎五首ヲ作り奉ツタ、○板垣氏ノ家ニ来リ午食(ソウメン)キゲタサンヨリ新鮎五尾イタダク 腹張ル ○佐々木令息ヨリ写真トツテモラフ ○夜直チニ寝タガ電灯消エタリシテ寝苦シカツタ



## ◆特別展（当館内守谷夫妻記念室）

### ◇「斎藤茂吉と食 詠んで、描いて、感謝して」

斎藤茂吉は、鰻を好物とし食通であったことは広く知られ、茂吉が好んだ食材などを詠んだ歌や絵、随筆(原稿)などの作品を多く残しています。この特別展では茂吉の食に関する資料を中心に展示しました。

会期 令和7年4月26日(土)から令和7年8月31日(日)まで

### ◇「斎藤茂吉とふるさと ーみちのく界限ー」

斎藤茂吉は山形の自然、風土と共に家族や郷土の人々に育まれて成長し、ふるさとを思い数多くの作品を残しました。この特別展では、茂吉と山形・東北とのかかわりを示す資料を中心に展示しました。

会期 令和7年9月13日(土)から令和8年3月31日(火)まで

## ◆講座・ワークショップ

### ◇茂吉講座／「斎藤茂吉と食 ～茂吉短歌弁当を味わおう～」

特別展「斎藤茂吉と食 詠んで、描いて、感謝して」の魅力を深掘りする関連事業としての講座を企画・実施しました。

日時 令和7年6月22日(日) 午後0時30分～午後2時00分

会場 斎藤茂吉記念館内集会室(1階)・守谷夫妻記念室(地階)

参加費 1,200円(弁当代) ※別途入館料

運営協力 布宮雅昭氏(歌人・山形県歌人クラブ名誉会長)

講師 五十嵐善隆(当館学芸員)

参加 21人

### ◇茂吉講座／「斎藤茂吉のふるさとへのまなざしについて」

特別展「斎藤茂吉とふるさと ーみちのく界限ー」の魅力を深掘りする関連事業としての講座を企画・実施しました。

日時 令和7年11月9日(日) 午後1時30分～午後2時30分

会場 斎藤茂吉記念館内集会室(1階)・守谷夫妻記念室(地階)

参加費 無料 ※別途入館料

運営協力 布宮雅昭氏(歌人・山形県歌人クラブ名誉会長)

講師 五十嵐善隆(当館学芸員)

参加 20人

### ◇夏休みワークショップ／「茂吉記念館スケッチ会」

夏休み期間中における新たな企画で、斎藤茂吉の魅力を再発見するきっかけとして館内展示物をスケッチ(写生)するワークショップを行いました。当日参加者が描いた作品は、館内ロビーに特別展「斎藤茂吉と食 詠んで、描いて、感謝して」会期中掲示しました。

日時 令和7年8月3日(日) 午後1時30分～午後2時30分

会場 斎藤茂吉記念館内集会室(1階)・守谷夫妻記念室等(地階)

参加費 無料(※別途入館料)

講師 後藤拓朗氏(画家・文教の杜ながい事務局長)

参加 7人

## ◆斎藤茂吉記念館役員等の変更

### ◇評議員の選任

公益財団法人斎藤茂吉記念館評議員会が令和7年6月24日に斎藤茂吉記念館内集会室において開催され、大沢芳朋氏の退任に伴い、川崎朋巳氏が選任されました。任期は令和10年6月までとなります。

### 第28号 編集後記

本号28号は従来の紙媒体からウェブ版のみの館報とした最初の号となります。より多くの皆様に当記念館と斎藤茂吉の理解を深めてもらうため、掲載内容をリニューアルいたしました。本号のため本多稜氏より玉稿を頂戴しました。厚く御礼を申し上げます。なお、本年も茂吉研究の向上につながるきわめて重要な資料と作品の寄贈・寄託がありました。これは茂吉の遺族・親族をはじめとする関係各位のご厚意によるもので大変有難く思います。それらの新資料は次年度以降に順次公開の予定です。(編集担当=五十嵐)

#### ◆ご利用案内

- ◇開館時間 9:00～17:00(入館受付 16:45 まで)
- ◇休館日 毎週水曜日(祝日・休日の場合は翌日)  
7月第2週の7日間・12月28日～翌年1月3日  
一般：大人 600 円・学生 300 円・小人 100 円  
団体：大人 500 円・学生 250 円・小人 50 円  
※学生：高・大学生 小人：小・中学生  
※団体 10 名様以上 ※障がい者割引(団体料金適用)
- ◇音声ガイド 300 円(英語版有)

#### ◆交通案内

- ◇お車でお越しの方(※無料駐車場有：普通車 70 台/大型車 5 台)  
・東北中央自動車道かみのやま温泉 I.C.から市内方面 20 分
- ◇電車でお越しの方  
・JR 奥羽本線「かみのやま温泉駅」からタクシー 10 分  
・JR 奥羽本線「茂吉記念館前駅」下車徒歩 3 分

館報「茂吉記念館だより」第28号 ■発行／令和7年12月15日

◇発行人／波克彦 ■編集・発行／公益財団法人斎藤茂吉記念館 〒999-3101 山形県上山市北町字弁天 1421  
TEL023-672-7227 FAX023-672-2626 URL <https://www.mokichi.or.jp>

※本紙は、令和7(2025)年12月15日に公益財団法人斎藤茂吉記念館公式サイトで公開の「ウェブ版館報『茂吉記念館だより』第28号」を印刷出力するために再編集したものです。  
※斎藤茂吉の作品・写真等の著作権は失効していますが、それ以外の文章・画像の著作権は執筆者または当館にあります。